

緒章

媼おうなを負うていくらも行かぬうちに、鈍空にびぞらを轟とどろかせて北風が吹き始めた。
箒ほきを立てたように並ぶ街道のポプラが一斉に撓たむみ、枯葉と氷の屑くずとが剃り上げた弁髪べんがみの額を打った。

しかし俯うつむけば媼の顔が風に晒さらされてしまう。背負った体は藁わらのように軽く、掌てのひらに触れる尻しりは紙の薄さであった。自分が俯うつむけばそれとたんに、媼の体は風に拐まがられて長城の涯はまで飛ばされてしまふように思えた。

曠野あれのには身を寄する小屋のひとつとてなく、地平はきつぱりと天地を分かっていた。奉天の街は遙かであった。

「もうよい。わしを棄すててゆけ。おまえが世にも稀なる義侠であることはようわかった。仏様へのみやげ話にもなろう。さあ、わしに構かまわず行きやれ」

耳元みみもとで囁ささやく媼を揺すり上げて歩みを早めた。こうして無事に奉天城たんとまで辿り着けるとは思え

ぬ。しかし凍土にうち棄てられて死ぬよりは、人の背に負われて息絶えるほうがいくらかはましであろう。

「婆様は、いったいいくつなんだ」

歩きながら余りの軽さを怪しんで訊ねた。

「さてな。勘定をするのが面倒になってしもうたゆえ、八十より先はわからぬ」

「ははっ、そいつはいいや。もしや百寿を超えてなさるんじゃねえのか。だとすると、お生まれは乾隆様の御世かえ」

「これこれ、下賤の者が軽々しう乾隆様のお名前など口にするではない。天罰が下ろうぞ」

「へっ、天罰ならとうに下ってるわい。おやじは野垂れ死に、おふくろは俺を捨てて馬医者嫁になった。拾われた鍛冶屋はおん出されて、ようよう旅籠はたごに住みこんでおまんまが食えるようになったら、このざまだ」

「すまぬ」と、媼の体がしぼんだ。

「乾隆様なら、わしは存じ上げておるよ。子供の時分、たいそう可愛がつていただいた」

「へいへい。そいつア大したもんでござんすね。婆様は御殿のお生まれでござんしたか。まったく、そのおひいさんが何の因果で俺みてえな貧乏人に背負われて、こうしてやがるんだらう」

短慮であったとは思わぬ。辛抱強いたちの自分のしたことが、誤りであるはずはない。宿賃のかわりに卦けを占うという約束で泊めた老婆を、旅籠の亭主はさんざ打ちすえたうえに放り出したのだから、その無体を止めた自分は、人として当然のことをしたまだけだと思ふ。

「それにしてもよ、婆様。易者つてものは、もうちょいとほうまいことを言うもんじゃねえのか。商売繁盛、家内安全、健康長寿とかよ、そういうことを言つてやりゃあ、ぶん殴られるどころか、見料だつてめぐんでもらえただろうに。それを、何だつて。さほど遠くねえうちにこの宿は匪賊に襲われて、運の悪いお客もろとも一家皆殺し。そりゃねえだろ、婆様」

媼の乾いた掌が、弁髪ひざくの額を風から被おおつた。思いがけずやさしげな、温かい掌であつた。

「わしは嘘が言えぬ」

「へえ。そしたら、婆様をかばつて飛び出した俺は、命が助かつたんか」

「そういうことになるであろうな。おぬしの義侠を、仏様がおほめになつたのであろうよ」

凶河堡飯店に備むとわられてから四年がたつ。亭主の吝嗇りんしやくぶりには肚はらを据えかねていたが、罷やめたところで飯を食うあてはないのだから、乱暴を諫いさめるだけならともかく、老婆を背負つて宿を飛び出たのは早計というものであろう。

「その匪賊は、いつやつてくるんだ」

「わからぬ。しかしさほど遠い先のことではない。四日か、五日か」

「おやじさんも、おかみさんも、子供らも殺されちまうのか。だつたらこうしちやいらねえ」
踵きびすを返そうとすると、媼は強い声で叱なぐつた。

「ならぬ。天命に逆ろうてはならぬ。あの者らは天命により死に、おぬしは天命により生き延びた。それを覆さんとするれば、おぬしの天命も消えてなくなる。振り返つてはならぬ。さあ、行いけ」

再び風に向いて歩き出す。一筋に続くポプラの並木の先は、散りまどう水の帳とばりに隠されてしま
った。

天命という言葉のあらたかさが、力に変わったようであった。体が温もつてきて、奉天城まで
歩き通せそうな気がしてきた。

「おぬし、齢としはいくつになる」

「光緒様のご即位の年に生まれた。とてもそうは見えねえんだが、これでも二十歳はたちなんだ」

「ほう、小さいの。わしはまた、年端としはもいかぬ子供かと思うたが」

「なんだよ。婆様は人の未来がわかるくせに、齢もわからねえのか。やっぱし信じられねえな。
俺アつまらねえことをしちまった」

「つまらぬことであるものか。わしは嘘をつかぬ」

体は小さいが、力は強い。頭もそう悪くはないと思う。ただ、幼いころから食うことに精一杯
で、未来などは考えたこともなかった。

「婆様。ちよつと休ませてくれ。腕が痺しびれちまった」

風をよけるのころあいの槐えんじゅの古木の下で、媼をおろす。出がけに宿の台所からくすねてき
た饅頭マントウを二つに割り、肉の詰まった大きなほうを老婆に手渡した。

「名を聞かせてくりよう」

と、媼は皺しわだらけの目を向けた。

「チャン」

饅頭をかじりながら無愛想に答えると、媼は娘のようになると笑った。

「この支那に、チャンとリイは馬の糞と同じほどおるわい。姓と名を覚えてくりよう」
答えるのも面倒だが、けつして嫌いではない名前が口からすべり出た。

「チャン・ヅォリン」

「どのような字を書く」

「字は書けねえ。俺が書けるのは、これだけだ」

石くれを拾って、「虎」の字を地に書いた。いつであつたか、宿の客にその一字だけを教えてもらった。虎は勇敢な獣だから、その字だけを覚えようと思つたのだ。

「フー、か。それはおぬしの名とは何の関りもないの。しかし、おぬしの義侠としなやかな肉は、虎に似ていなくもない」

それから老婆は、汚れた爪の先を地になぞつた。

「リンの字は、ちがうと思う。林じゃなくつて、雨だとおふくろが言つてた」

媼は少し考えてから、「対」^{トエ}と肯いた。

張作霖。

老婆の書き直した字には見覚えがあつた。たぶんそれにまちがいはない。

「対。そうだよ、婆様。俺の名前は張作霖^{チヤン・ヅォリン}。生まれは海城県の家掌寺村だが、れつきとした漢族なんだ。俺の爺様が、長城を越えて満洲にやつてきた」

老婆は深く肯き、黒檀^{こくたん}の数珠^{じゆず}を額に当てて目をつむつた。その臉^{まぶた}の裏には、飢饉に追われて父

祖の地を棄て、遙か関外の沃野を目ざした流民の姿が映っているようであった。

ややあつて目覚めたように顔をもたげ、氷のかげらの舞う空を仰ぎ見ながら媼の口にした託宣は、明日というものすら信じなかつた作霖をおののかせた。

張作霖。

汝、貧しき流民の子よ。

父もなく母もなく、錢も馬も家も、恃みとする人のひとりとしてない、天の涯つるところ地の滅ぶかぎりまで何物も何びともなき、汝、張作霖よ。

聞かずともよい。媼の戯れ言と聞き流すのであれば、それもかまわぬ。しかし汝の生涯は、大いなる紫微宮の星座に護られている。

今、媼の老いたる眼は、天蓋の雲を透して空の究みに拡がる星ほしを見た。もし媼の修めたる百年の易占に憾みなくんば、汝は遠からず百騎の兵を率い、やがては五十万の軍勢を養う大元帥となるであろう。そしてその威令の及ぶところ北は大興安嶺、黒龍江のほとり、西は大ホロンバイルの平原を越えてゴビの砂漠にも至るであろう。

張作霖。

汝、貧しき流民の子よ。

恐るるではない。汝の生涯は大いなる紫微宮の星座に護られている。虎のごとく野を駆ければ、出会う者はみなことごとく汝を畏れ崇め、服うであろう。

張作霖。

汝、満洲の王者たれ。汝、東北の霸王たれかし。

見よや、張作霖。顧てわが指先を辿れ。いつしか垂れこめる雲が割れ、耀う蒼穹に七色の虹がかかつておるではないか。

天が、汝の明日を寿いでおるのじや。

奔れ、張作霖。

遙かなる中原の虹をめざして——。